

# 令和6年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

## 1 研究の内容

授業力向上 (○) ・ 道徳教育 ( ) ・ キャリア教育 ( ) ・ 特別活動 ( )  
カリキュラム・マネジメント ( ) ・ その他 (○) (内容：E S D)

## 2 学校の概要

(単位：人)

プロジェクト校	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任名
菊池市立菊池南中学校	463	42	久保 敦嗣	上野 元気

## 3 研究主題

「できた」「わかった」を通して主体的に学ぶ生徒の育成  
～E S Dの視点を踏まえた授業づくりと支持的風土づくりの適切な評価を通して～

## 4 研究主題設定の理由

現行の学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」が重視され、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携することが求められている。また、令和5年6月に閣議決定された、第4期教育振興基本計画では、2つのコンセプトとして、「持続可能な社会の創り手の育成」と、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が挙げられている。子供たちが社会との繋がりを実感しながら、持続可能な社会の創り手として自ら学ぶ必要性がこれまで以上に求められている。

本校は平成31年度に国立教育政策研究所教育課程研究(E S D)の指定校となった。そのことを踏まえて「持続可能な社会づくりを目指し行動する生徒の育成」を研究テーマとし、E S Dの視点に立った学習活動に取り組むとともに、教育課程や教育内容の見直しを進めてきた。令和5年度からは、本校の教育目標である「『生きる力』を培い、未来を創造する生徒の育成 ～夢に向かって賢く・仲良く・健やかに～」のもと、E S D教育の推進を基盤にしつつ、学力向上を目指し新たなテーマを設定した。

しかし、昨年度12月の県学力調査・市学力調査によると、現3年、現2年ともに基礎知識の定着や関心・意欲等学力面での課題が見られた。さらに、同時期に実施したi-c-h-e-c-kの結果からは、安心できる学級づくりという点で課題があるということも分かった。そこで今年度、ユネスコスクールへの加盟申請を行う等、再度E S Dの視点を整理しながらこれまでの取組を見直し、学ぶ意味を高めることで全ての教育活動を通して持続可能な社会の創り手を育成する。

## 5 研究の具体的な取組内容の実際

### (1) 三部会の視点

子供たちが「できた」「わかった」と実感することで主体的に学ぼうとする姿を目指し、研究組織としては「授業づくり部会」「なかまづくり部会」「評価づくり部会」の三部会を編成し、視点に沿った研究を進めていく。各部会の視点は以下のとおりである。

授業づくり部会	なかまづくり部会	評価づくり部会
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習規律の徹底</li> <li>・基礎基本の定着を図る工夫</li> <li>・生徒の意欲が持続する課題設定の工夫</li> <li>・対話的な学びを意識した授業展開の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級活動の充実</li> <li>・道徳教育の充実</li> <li>・発達支持的生徒指導の推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・E S Dの推進</li> <li>・五者連携の教育活動</li> <li>・生徒の実態調査</li> <li>・各教科の評価の見直し</li> </ul>

## (2) 学校教育活動を通して重点的に育成を目指す資質・能力

持続可能な社会の創り手の育成を目指し、これまでの本校のE S Dの取組の成果を生かし、E S Dの観点から「学校教育活動を通して重点的に育成を目指す資質・能力」を設定し、教育活動を進めていく。本校で定めた「学校教育活動を通して重点的に育成を目指す資質・能力」は以下のとおりである。

A 課題を見出す力	E コミュニケーションを行う力
B 進んで参加する態度	F 他者と協力する態度
C 批判的に考える力	G 未来像を予測して計画を立てる力
D 多面的・多角的・総合的に考える力	H つながり尊重する態度

## 6 目指す成果【検証方法】

- (1) 熊本県・菊池市学力調査で、基礎・基本の定着において伸びが数値的にも高まりが見られることを目指す。【各学力調査の分析】
- (2) 安心できる学級・支持的風土づくりに関する質問項目で、肯定的な回答をする生徒の割合が数値的に増えることを目指す。【i - c h e c kの分析、本校独自の評価シートの定期的な実施及び分析】
- (3) E S Dの観点から、「学校教育活動を通して重点的に育成を目指す資質・能力」について、さらに生徒の持続可能な社会の創り手としての自覚が高まるように評価方法を検討し、数値的な伸びを目指す。【本校独自の評価シートの定期的な実施及び分析】

## 7 研究実施の実際

時 期 (月)	実施内容
3月	(生徒会リーダー研修・各委員会の年間計画作成)
4月	(研究テーマの決定、全校集会での共通実践事項の確認を行う。)
6月	(西留安雄先生による授業参観及び模擬授業)
7月～2月 (全6回)	総合的な学習の時間(未来創造タイム)による各委員会の活動。 ・年度当初に各委員会でE S Dと関連させて計画した年間計画をもとに、本校で設定した重点的に目指す資質・能力の育成やS D G sの達成に寄与することを目指して活動する。 ・探究的で深い学びとなるように、課題の把握、計画及び実施、振り返り、次年度の計画というP D C Aを意識した活動を行う。
7月	S D G sワークショップ(2年生対象)
	研究授業(学校訪問)で全ての授業に班活動を取り入れ、E S D

	の視点を踏まえた単元デザインをつくる。
8月	校内研修（西田指導教諭によるE S D講話）
	校内研修（福岡教育大学副学長石丸哲史教授によるE S D講話）
	全校集会で主体的な学び、E S D、なかまづくりについて共通理解を図る。
8月～	南中わくわくタイム（なかまづくり）の実施
9月	S D G s ワークショップ（1年生対象）
	研究授業（大研）で生徒が主体的・対話的に学ぶための展開や学習形態の工夫を取り入れる。
12月	全校集会で8つの資質・能力、未来創造タイムについての共通理解を図る。
1月	公開授業
	研究のまとめ、実践事例集作成
2月	研究の振り返り、次年度の計画作成

## 8 市町村教育委員会の取組の実際

- 熊本県菊池教育事務所と連携し、本事業の適切な運営のため指導・助言を行った。
- 校内研修に際し、授業を構想する段階及び授業後の研究会において、指導主事が助言を行った。
- 外部講師として西留安雄氏を招聘し、生徒が主体となる学びへの授業改善を図る研修を実施した。
- E S Dティーチャープログラム実施し、E S Dを適切に指導できる教員に求められる資質・能力を明らかにして、その力量形成を図った。

## 9 研究の成果【検証方法】

今年度の研究を通して得られた成果は以下のとおりである。

### ○授業づくり部会

授業づくり部会では、生徒の主体的な学びにつながる授業力向上のために、生徒と教師がともに歩いていく段階的な授業改革を行ってきた。まず、年間を通して全校集会で授業の受け方や理想の授業について目指しているものを共有していった。次に、総合訪問で授業構想案を作成する際に、全ての授業における班活動の実施やE S Dの視点を踏まえた単元デザインを共通実践事項として取り入れた。さらに、大研や公開授業などを通して生徒が主体となる授業づくりについて検討し、授業改善、授業力向上に取り組んだ。授業改善については以下の表1に示すようにi - c h e c kの授業に関する項目で、4月と12月を比べた際に数値的な上昇も見られた。

また、今年度の授業づくり部会の取組を通して「『わくわく』が生まれる単元デザインの工夫」「生徒が自己選択する場面の設定」「考えを参照・共有できるようなI C T活用の工夫」「E S Dの視点を踏まえた評価の工夫」という4つの共通実践事項を整理することができた。

表1 i - c h e c k の授業に関するアンケート結果

項目	学年	4月	12月	差
学校の授業では、友だちと教え合う時間がありますか？	1年	95.1	96.9	+1.8
	2年	84.9	95.5	+10.6
学校の授業では、となり同士やグループで話し合ったり、討論したりすることがありますか？	1年	91	95.4	+4.4
	2年	80.7	90.4	+9.7
グループで話し合う授業は楽しいですか？	1年	91	92.4	+1.4
	2年	86.1	82.2	-3.9▼

○なかまづくり部会

生徒が主体的に学びを進めていくための基礎となる人間関係の構築、コミュニケーション能力の育成が必要であるというところから、全学年、毎週火曜日の帰りの会に「南中わくわくタイム」を新設した。生徒の実態に応じたアクティビティやエンカウンターに取り組み、なかまづくりを進めていった。夏休み明けからスタートしたが、11月に実施した生徒会選挙では、多くの立候補者が「南中わくわくタイムを生徒会として充実させたい」と公約を述べたように、生徒にも肯定的に意識されるものになった。生徒アンケートからも、「班活動以外でも班の人と話す機会が増え、仲良くなることができた」などの肯定的な意見が見られた。また、表2に示すように i - c h e c k のソーシャルスキルの項目では、4月と12月を比べた際に数値的な上昇も見られた。また、「誰一人取り残さない」ために生徒理解に力を入れ定期的に特別支援教育に関する研修も行った。

表2 i - c h e c k のソーシャルスキルに関するアンケート結果

項目	学年	4月	12月	差
クラスの話し合いや友だちとの間で意見が合わなかったとき、みんなが納得できるように考えて提案していますか？	1年	71.5	73.3	+1.8
	2年	47	45.9	-1.1▼
クラス全体やグループ、友だち同士で話し合いをするとき、自分の意見を積極的に発言していますか？	1年	77.1	79.4	+2.3
	2年	46.4	52.2	+5.8

○評価づくり部会

令和元年・2年の研究をベースに、E S D の視点を踏まえた資質・能力について、再度校内研究推進委員会で検討することができた。7月に行われた総合訪問では、学習構想案を作成する際に、8つの資質・能力を構想案上に位置づけ、職員で意識することができた。また、8つの資質・能力を各教科に落とし込むために、学習指導要領解説と照らし合わせながら検討し、資質・能力系統表を作成した。最終的には、全校集会を通してE S D の視点を踏まえた評価の基準を明確にし、生徒と共有していくことができた。また、I C T を活用し、生徒の振り返りを即時フィードバックすることができるようになったため、生徒が単元を通じた学びの中で見通しを持ち、自己調整・修正しながら学びを進めていくことができるようになった。

## 1 0 研究の課題と今後の展望

「生徒と共有しながら進める」、「授業力向上につなげるため教師が日々アップデートする」という研究のコンセプトを引き続き大事にしていく。研究指定・研究発表が終わっても持続可能な研究を進める。部会ごとの課題と展望は以下のとおりである。

### ○授業づくり部会

授業改善に関する数値的な伸びが見られた一方、県学力調査における各教科の数値向上には至っていない点が課題として挙げられる。今後もさらに、生徒が主体となる授業を行うために、整理された4つの実践事項を全職員で共有・実践していく。具体的には月間目標として2つの項目を実践し、毎月振り返りを行い、教師が自己評価を行う。また、生徒とともに取組について考え、生徒を主語とする授業づくりや共通実践を進めていく。教師全員で実施することが難しければ、段階を設定するなどして、教師が「できそうだ」「やってみよう」と感じられるような工夫を行う。ICTについては、活用方法を共有する研修を行い、生徒がタブレット端末をツールとして活用する機会をさらに増やしていく。

### ○なかまづくり部会

わくわくタイムを行う際には、活動だけにならず、目的の確認やそれに即した振り返りを行うことを継続していかなければならない。また、現在は教師がアイデアを提案しているため、生徒主体の活動につなげていくことも考えられる。その際にも目的を生徒と共有し、何のために行っていくのかを生徒にも考えさせていく。また、年度当初の職員会議や全校集会を通して、班づくりや学級経営、特別支援教育の視点に関して共通理解を進める。

### ○評価づくり部会

E S Dの視点から設定した8つの資質・能力について、1単位時間や単元、題材での振り返りの方法の検討が必要である。また8つの資質能力と行事やキャリアパスポート等との関連についても研究を進め、前期や後期など大きなまとまりでの評価についても検討の余地がある。特に、総合的な学習の時間の「未来創造タイム」が、より探究的な学びとなり、生徒自身が8つの資質・能力を踏まえた振り返りができるように、次年度の内容を教師と委員長で計画できる時間を設定する。また、位置づけた評価基準が学習到達度を評価するためには妥当であるのかを引き続き検証し、修正していくことも必要である。

## 1 1 研究成果の普及

令和6年度は公開授業において、全体会で本校の研究の概要、総合的な学習の時間「未来創造タイム」の取組について発表し、国語の研究授業・授業研究会を行った。また、令和6年度・7年度の菊池市学力向上研究指定を受けており、令和7年度は県・市指定研究発表会を県下の教職員対象に公開する。